



〈R02142061〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～8ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。
 - (4) 解答用紙は折り線のところで山折りにしてから解答すること。
 - (5) 字数指定のある問いに答える場合は、句読点などの記号も字数に含まれるものとする。
 - (6) 字はすべて丁寧に書くこと。
- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 8 この問題冊子は持ち帰ること。

東日本大震災の被災者の救済や被災地の復興にあたっては、国家が物資、人材、資金、技術などの資源を大規模かつ計画的に動員し続けなければならない。その際、国家は、東北地方という一部の地域を救済・復興するために、北海道から沖縄までに住む日本国民全員に一定の負担を強いなければならない。¹しかも、ここで言う「日本国民」には、未だ生まれていない世代も含むのである。

例えば、国家は、課税によって国民の財産の一部を広く徴収して復興資金を捻出し、東北地方の被災者のためだけに集中的に投下する。あるいは、国債を発行することで、現在の被災者を救済するために将来の国民と負担を共有することもできる。また、国家予算において、被災地の復興の優先順位を最上位に置くのであれば、他の政策のための財源が削られ、その政策によって利益を得る人々に犠牲を強いることにもなるだろう。

国家が東北地方の被災地を復興するためには、被災していない地方の人々や東北地方の復興によって直接恩恵を受けることのない人々に対しても、負担や犠牲を強いなければならないのである。復興を効果的に進めようとすればするほど、国家が国民に課す負担はより重いものとなるであろう。

さて、もし日本が非民主的な独裁国家であったならば、強権を発動して有無を言わず国民の財産の一部をとり上げて被災地に投入することもできるだろう。しかし、我が国は言うまでもなく民主国家である。民主的な議会の手続きを踏み、国民の同意を取り付けなければ、そのようなことはできない。民主国家が被災地を復興するためには、それによって直接利益を受けない人々も負担に応じることが不可欠となるのである。

東北地方の被災地の復興に対して直接の利害関係をもたない人々が、復興の費用負担に同意する上で大きな役割を果たすが、彼らが被災者に抱く強い同情の念である。被災地以外の地域に住む日本人は、被災した日本人を同じ運命共同体に属する同朋²とみなし、同朋の不幸に強く共感している。この同国人に対する同朋意識、すなわちナショナリズムが、復興費用の負担への同意を可能とするのである。

このように国家（より正確には近代国家）は、とりわけ民主国家は、ナショナリズムに訴えることで国民の資源を動員するのである。被災者の救済と被災地の復興のためには、資源を動員する国家の力が不可欠であるが、その国家の力は、ナショナリズムに支えられているということである。

東北地方以外の地域に住む人々が、東北地方の被災者に対して抱く同朋意識が強固であるほど、つまりナショナリズムが強いほど、国家による復興のための資源の動員はいつそう容易になる。言い換えれば、日本国民全体が団結・連帯すればするほど、被災地の早期復興が実現するのである。国民（ネイション）が団結・連帯して行動することによって生み出される力こそ、「国力（ナショナル・パワー）」にほかならない。

なぜ、東日本大震災が乗り越えなければならぬ国難なのか。それは、単に東北地方の被災地が復興しなければ国民生活が経済的に不便になるからというだけではない。被災地を放置し、東北地方を見捨てるということは、東北地方以外の地域に住む日本人が、東北地方の人々を同朋とみなしていないということであり、国民という共同体が分解しているということだ。真の国難とは、国民の間で共有されるべき一体感や同朋意識が失われ、³国民が分裂することなのである。

大規模な自然災害や事故といった危機を克服するためには、国家及び国民の力が果たす役割は決定的である。このことは、冒頭の東日本大震災を例にとって考えれば、むしろ、当たり前のことであるようにみえる。

ところが、金融危機やデフレ不況など、経済一般における危機については、国家の機能を強め、国民の統合を高めようとする経済政策がとられてこなかった。むしろ、二十年に及ぶ平成大不況という危機において、我が国が進んだ路線は、国家機能を拡大するのではなく縮小しようとするものであり、国民統合の求心力ではなく遠心力を働かせようとするものであった。いわゆる構造改革路線⁴である。構造改革論の根底には、次のような経済観がある。

人口減少と少子高齢化によって、内需はもはや縮小の一途をたどる運命である。長きにわたる日本の閉塞感^aは、衰退が運命づけられている国内市場に拘泥^bし、内向きになっていくからである。この閉塞感を打破するためには、日本人は、もつと海外市場へと積極的に打って出て活躍すべきだ。また、海外、とくにアジアから投資や人材を積極的に呼び込み、成長するアジアの活力を国内に取り込もう。国家の規制や社会の慣行などの障壁は、モノ、カネ、ヒトの国際移動の活性化を妨げるものであり、即刻撤廃すべきだ。

こうした世界観の下、経済界、知識人、マス・メディア、世論の大半が、国家による管理や規制の力を弱め、国民を国家に拘束されずに自由に動くようにする政策を支持してきた。それが経済危機を克服し、繁栄をもたらすものと信じただからである。このような世界観と政策理念は、根強く我が国を支配してきた。

しかし、構造改革を支持した人々は、⁵それが被災地復興の理念とは根本的に矛盾することに気づいているのであろうか。

例えば、日本人がみな、ビジネス・チャンスを求めて海外市場に出て行ってしまふようならば、東北地方の被災地の復興の担い手はいなくなる。国民が、成長するアジア市場よりも、国内の不幸に目を向けるからこそ、被災地の復興は可能になるのである。

実際、日本で働いていた多くの外国人が、地震や原子力発電所の事故をみて、あるいは母国政府の国外退避勧告を受けて、我先にと帰国していった。筆者は、それを非難しているわけではない。グローバルに移動する人材というのは、そういうものだけと言いたいだけである。⁶被災した東北地方がどうなるかと関係ないというのが、グローバル資本の論理である。

要するに、我が国がグローバル化すればするほど、東北の被災地を復興することは困難になるということだ。

そもそも「グローバル化」とは、簡単に言えば、資本、企業、個人が利益を求めて、国境を越えて自由に移動するようになる現象のことである。この現象は、冷戦がホウカイした一九九〇年代以降、加速したと考えられている。構造改革路線の経済政策は、このグローバル化に対応しようとしたものである。

そして、このグローバル化の推進を目指す構造改革には、それを支えるイデオロギーがある。それは、「新自由主義」あるいは「市場原理主義」と呼ばれている。⁷新自由主義の基本的な教義は、大ざっぱに言って、次のようなものである。

⁸世界は、自己利益を合理的に追求する個人（あるいは企業）から構成されている。利己的な個人が自己利益を追求して競争にハゲむ結果、資源が最適に配分され、経済は効率化して繁栄する。これが市場メカニズムである。この市場メカニズムを機能させるため、国家は、個人の経済活動の自由を最大限許容することが望ましい。ヒト、モノ、カネが国境の制約なく自由に流れていけば、世界経済全体が繁栄する。

新自由主義者は、国家が経済に介入することで、自由市場よりも経済を豊かにすることができるという考えを真っ向から否定する。また、新自由主義者は、国境に束縛されて生活を営む個人すなわち「国民」の存在意義も認めない。国境に束縛されて活動するような個人では、市場メカニズムが働かず、世界経済は繁栄しないからだ。つまり、新自由主義は、国家が国民のために積極的に活動するという発想を根本的に否定するイデオロギーなのである。

現実の世界を見れば、確かに、企業やマネーは、国境を飛び越えて利益の最大化を求め、一番魅力的な投資環境をもつ国家へと向かうようになっていく。しかし、グローバル資本やグローバル企業にとって魅力的な国が、その国の国民にとって望ましいものであるとは限らない。例えば、投資家にとっては、株主利益を最大化することが望ましいのである。そのためには、企業が労働者を簡単に解雇して人件費をカットし、利益率をできるだけ高められるような国の方がよい。しかし、その国の国民にとっては、雇用が不安定な状態になるというのは、まったく望ましいものではない。

グローバル化の時代になると、企業は、成長する海外市場に販路を求めると同時に、より賃金の安い労働者を雇えるようになり、先進国の労働者の実質賃金は上がらなくなってしまった。こうなると、労働者の利益と経営者の利益とは、もはや一致しなくなる。

グローバル化に適応するための構造改革は、国民の利益より企業や投資家の利益を優先するという政策なのである。構造改革を支える新自由主義というイデオロギーが提示する世界は、利己主義的な個人や企業だけで構成されており、そこに「国民」という存在はない。構造改革が国民の利益を優先しないのも、哲学的に考えれば当然だと言えるであろう。

（中野剛志『国力とは何か』より・一部改）

問一 傍線部 a～d のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二 傍線部 1 で述べられている政策の具体的な例を本文中から五字以上十字以内で抜き出して答えよ。

問三 傍線部2「有無を言わず」を次のように言い換えるとして、その空欄に入る漢字二字を答えよ。
無用で

問四 傍線部3「国民が分裂する」ということの具体的な例として本文中で挙げられているのはどのようなことか。次のように答えるとして、その空欄1・2に入る言葉を本文中からそれぞれ五字以内で抜き出して答えよ。

国民が

1

 と

2

 に分裂する。

問五 傍線部4「構造改革路線」の本質が端的に述べられている部分を本文中から二十六字で探し、その始めの五字を答えよ。

問六 傍線部5のように言えるのはなぜか。次の中から適切でないもの一つを選び、記号で答えよ。

- ア 構造改革の政策は、日本国民の団結や一体感を失わせる結果をもたらすから。
- イ 構造改革を進めることは、日本という国家の機能を弱めていくことを意味するから。
- ウ 構造改革の担い手は、自己利益の追求だけに専心し、他のことには関心を持たないから。
- エ 構造改革では、自国を特別視せず、国境を越えて自由に経済活動を行うことを目指すから。
- オ 構造改革の経済観では、国内の災害はビジネス・チャンスを失わせるものにすぎないから。

問七 傍線部6のような「グローバル資本の論理」と対照的な意識を表す言葉を本文中から五字以上十字以内で抜き出して答えよ。

問八 傍線部7「新自由主義」はどのような弊害をもたらすとされているか。次の中から適切でないもの一つを選び、記号で答えよ。

- ア 内需が縮小の一途をたどる。
- イ 国民を守る規制が撤廃される。
- ウ 労働者の雇用が不安定になる。
- エ 企業が海外に生産拠点を移す。
- オ 労働者の賃金が上がらなくなる。

問九 傍線部8のような世界観とは対照的な考え方を次のように述べるとして、その空欄に入る言葉を本文中から五字で抜き出して答えよ。

個々人は、利己的な存在ではなく、

--

の一員である。

問十 次の中で本文の内容と合致しないもの一つを選び、記号で答えよ。

- ア 国力を支えるものは、資源や経済という物質的な要素だけではなく、国民の間で共有される精神的な連帯である。
- イ 新自由主義の教義では、市場メカニズムが絶対視され、それを制約する障壁をなくしていくことは正しいとされる。
- ウ 構造改革路線は、冷戦が終結した一九九〇年代から強まったグローバル化の流れに対応して採用された政策である。
- エ 新自由主義者は、個人や企業が自己利益を合理的に追求し競争していけば、国家と国民は経済的に繁栄できると考える。
- オ 市場原理主義を信奉する者が考える世界経済の繁栄とは、利己主義的な個人や企業が利益を上げることを意味している。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「人とのコミュニケーションは大切だ」とか、「社会ではコミュニケーション能力が問われる」とか、よく耳にする。その言い方からは、自分の考えをことばにして相手に伝えることや場の空気を読むことだけが「コミュニケーション」だとも思えない。でも、それだけではない。人とモノをやりとりすることも、重要なコミュニケーションの一部だ。

私たちは、つねにいろんなモノを人とやりとりしている。家庭の食卓で親のつくった料理を食べることも、子が親からお小遣いをもらうことも、働いて給料を手にすることも、そのお金を払って店でモノを買ったり、それを人にプレゼントすることも、すべて私たちが日常的にくり返しているモノのやりとりとしてのコミュニケーションだ。

でも、そのいろんなモノのやりとりのなかで、ふつうは「モノを買うこと」と、「人にプレゼントを渡す」ことは、まったく違う行為だと考えられている。親からお小遣いをもらって、店でモノを買うとき、お金が人から人へと同じように動いているのに、二つのお金のやりとりは、まったく違ってみえる。それは、なぜなのだろうか。

経済を研究してきた人類学は、こうした問いに向きあってきた。人からプレゼントをもらい、それへのお返しを渡すという贈与交換。経済とは無関係に思えるこの行為も、人と人とのモノを介したコミュニケーションとみなせば、店でお金を払って商品を買う行為と比較可能になる。この広い視野こそが、文化人類学ならではの思考法だ。

「贈与」を人類学の重要な研究テーマにしたのが、マルセル・モースだ。モースは、『贈与論』（原著初版一九二五年）のなかで、なぜ多くの未開社会にとって贈与がきわめて重要な意味をもつのか、その贈与がいかに法や経済、宗教や美など社会生活の全体と深く関係しているのかを考えた。贈与には、社会のあらゆることが混ざりあっている。モースは、そのことを「全体的社会的事実」と表現した。

モースが注目してとりあげた事例のひとつが、マリノフスキーがニューギニアの調査から報告した「クラ」という贈与交換の制度だ。トロブリアンド諸島とその近くの島々の首長は、カヌーの遠征隊を組織し、海を越えて贈り物を送り届け、食事や祝祭による歓待を受ける。それはときに命がけの危険な航海になる。このクラで贈り物として渡される宝物（ヴァイグア）には、二種類しかない。赤色の貝の円盤状の首飾り（ソウラヴァ）と白い貝を磨き上げた腕輪（ムワリ）の二つ。

首飾りは島々のあいだを時計回りに、腕輪は反時計回りに動くように、厳格な作法に則^{のっと}って贈られていく。他の島のパートナーからももらった贈り物は、しばらく手元に置いたあと、決められた方向の別の島のパートナーへと贈られる。保有しつづけることは許されない。首飾りや腕輪は、所有物でも、何かのために使われる消費財でもない。ひたすら贈り物として **A** しつづける。宝物には名前がつけられ、それを手にした人物の伝説が語り継がれ、神話とも関連づけられている。呪術的な力もある（病人の腹にこすりつけたりする）。この贈答品の交換が、人びとの価値観や社会的名譽、島々のあいだの秩序を支える上台でもある。

こういう話を聞くと、まったく異質な世界の理解不可能な話に思えるかもしれない。でも、じつは、私たちも同じようなことをしている。たとえば、サッカーW杯の優勝トロフィーがそうだ。あのトロフィーには歴代の名選手が手にし、数々の歴史に残る試合の記憶が刻まれている。ただの代替可能なモノではない。プレーする選手も、応援する観戦者も、多くの犠牲を払ってでも、このなかに使えるわけではない（事実上、売ることもできない）トロフィーの争奪戦に熱狂する。手にしたトロフィーは、四年後には手放され、またあらたな一時的保有者を決める戦いが世界中で繰りひろげられる。もしサッカーを知らない異星人がみたら、トロフィーをめぐって玉をケ^aって網に入れる壮大な儀礼を、クラと同じように好奇心をもって報告したかもしれない。私たちは、モノを介して不思議なコミュニケーションをしている。そこには、いったいどんな意味があるのだろうか。

モースは、クラの**b**ブンセキで重要な指摘をしている。それは、人びとがクラ交換だけをしているわけではない、という点だ。複数のモノのやりとりの形式が同時に並存している。

クラによる贈与交換が行われるとき、実用的な物品を経済的に交換する「ギムワリ」も行われる。ここでは執拗^{しつと}な値切りあいがある。それはクラでは許されない。相手に贈り物を強要するなど、クラでギムワリのようなふるまいをすると非難の対象になる。ほかにも、クラのパートナーでもある漁村と農村のあいだで農産物と漁獲物とを分け与えあう「ワシ」という関係もある。首長に奉仕した集団に食べものを分配する「サガリ」という儀式もある。

人びとは複数のモノのやりとりの方法を明確に区別しており、そこに違う意味を見いだしている。それは私たちも同じだ。プレゼントを贈ること、商品を買うこと。家族で食卓を囲むことと、レストランでお金を払って食事すること。つねに人のあいだでモノがやりとりされているが、私たちはそれを別のものとして区別している。親しい間柄の親密な贈り物の交換は、³商品の交換とは正反対の行為だとすら考えている。

なにが贈与交換と商品交換とを区別しているのか。文化人類学では、それらを次のように区別してきた。贈与交換は人と人をつなげ、商品交換は関係を切り離す。⁴「贈り物」は贈り主のことを想起させる。一方、「商品」は作り手や売り手を無関係なものとして切り離す。あるいは、社会秩序の再生産をめざす長期的な交換サイクルにかかわるか、利潤を追求する個人の短期的な交換サイクルにかかわるかの違い、との指摘もある。

家族は長期的に維持されると考えられているので、親が料理のたびに子どもにお金を払わせたりしない。親は子の世界をし、いずれは子が親孝行するといったように、関係の **B** が期待されている。その子が結婚して親になると、また自分の子どもに……と続く。人格化された社会の長期的秩序の再生産とは、そういうことだ。そこでは贈与の関係がふさわしい。一方、商品ならば、できるだけ安く買いたいし、できるだけ高く売りたい。それがどんな相手かは関係ない。有利な取引ができなければ、次も同じ人と売買するとは限らない。それが人間関係とは切り離された非人格的な短期的取引の意味だ。

ただし売買であっても、お得意様がいたり、行きつけの店ができたりすることもある。同じ商品でも、値段ではなく、お気に入りの店や知人だからという理由で買う人もいる。商売のうえでも、リピーターやファンを増やすといった長期的な関係が大切なのは明らかだ。商品交換が短期的で非人格的な取引だけに終始するわけではない。

商品交換と贈与交換は分離された営みではなく、連続線上にある。そのやりとりの連鎖のなかで、モノは意味や価値を変化させる。⁵どこでも売られている商品でも、親族の遺品だと、故人を偲^{おも}ばせる大切な形見になる。有名人の持ち物は、ありふれたモノであっても高額オークションの対象となる。モノは、いろんなリレギをたどる。このモノの意味／価値の変遷に注目したのが、イゴール・コピトフだ。彼は、モノが「交換不可能なかけがえのないもの」と「いつでも交換できる商品」という二つの極のあいだを動く、と指摘した。つまり、贈り物と商品との境界は固定していない。

だからこそ、私たちはいろんなモノのやりとりをとおして、その意味や相手との関係を変化させることができる。商店でも、特別におまけをつけたり、サービスで割引したりする。商品交換の場でも、贈り物を渡すかのようなふるまいをすることで、親密で長期的な関係づくりがめざされるのだ。

私たちが親密だと思っている人間関係は、特定のモノのやりとりをするからこそ、長期的な人格的關係として維持されている。⁶家族は何もしなくてもつながっているのではなく、食卓を一緒に囲むといった行為をとおして家族になる。別のモノのやりとり、たとえば食事のたびにお金を払わせたりすれば、その関係は別のものに変質するだろう。世界の現実には、こうして私たちのモノを介したコミュニケーションがつくりだしている。

(松村圭一郎「贈り物と負債」より・一部改)

問一 傍線部 a、c のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部 1 で述べられている一般的な見方とは異なる筆者の捉え方が端的に述べられている部分を、本文中から八字で探し、その始めの五字を答えよ。

問三 空欄 **A**、**B** に入る語として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア 持続 イ 踏襲 ウ 変容 エ 推移 オ 継起 カ 循環 キ 変遷

問四 傍線部2「クラでギムワリのようなまいるまいをする」と非難の対象になる」とあるが、クラとギムワリにはどのような違いがあるか。その説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ギムワリではその場その場で駆け引きが行われるが、クラでは定められた作法が厳格に守られる。

イ ギムワリではその物の経済的価値が重視されるが、クラではその物が持っている精神的価値が重要となる。

ウ ギムワリでは物は貨幣価値に置き換えられて取引されるが、クラでは物に値段を付けて売買することはできない。

エ ギムワリで取引される物は個人が所有してもよいが、クラでは個人がその物を保有し続けることは許されていない。

オ ギムワリでは物の日常生活における実用性が重視されるが、クラでは物が何かのために使えるという有用性は問題とされていない。

問五 傍線部3「商品の交換」の特質が端的に述べられている部分を本文中から二十二字で探し、その始めの五字を答えよ。

問六 傍線部4「贈り物」は贈り主のことを想起させる」とあるが、それはなぜか。次のように答えるとき、その空欄に入る二字の言葉を本文中から抜き出して答えよ。

「贈り物」は贈り主を したものであるから。

問七 傍線部5のように言えるのはなぜか。次のように答えるとき、その空欄に入る言葉を本文中から五字以上十字以内で抜き出して答えよ。

その遺品には故人の から。

問八 傍線部6のように言えるのはなぜか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。

ア 親が子どものために食べ物を買調えることで、親はその見返りとして子どもが親孝行することを期待できるから。

イ 親がつくった食事を子どもに食べさせるといふ贈与を通じて、親と子の間で家族という長期的秩序が維持されるから。

ウ 親が食事をつくり、子どもがそれに感謝するという短期的交換サイクルの中から、家族という関係が生まれてくるから。

エ 親と子どもと一緒に食卓を囲み、同じ料理を食べるといふ贈与交換を通して、親と子どもの人格的關係が保たれるから。

オ 親が料理のたびに子どもにお金を払わせたりしないことで、子どもは親に依存する気持ちを持ち続けることができるから。

問九 次の中で本文の内容と合致しないものを一つ選び、記号で答えよ。

ア コミュニケーションは言葉による意思伝達に限定されず、物のやりとりを通じて他者との関係を変化させることも含んでいる。

イ 商品交換と贈与交換は一見別々のものに見えるが、文化人類学の思考では両者は連続線上にある営みとして捉えることができる。

ウ ニューギニアで行われているクラやギムワリという物の交換の方法には、共同体における秩序を維持するといふ共通の目的がある。

エ クラで贈られる宝物とサッカーW杯のトロフィーには、それを知らない人びとからはその価値が理解されないという類似性がある。

オ 商品の売り手と買い手は元々切り離された関係だが、売り手が買い手にサービスを提供することで親密な関係を築くこともできる。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、紫式部、上東門院に歌読み優の者にてさぶらふに、大齋院より春つ方、A「つれづれにさぶらふに、さりぬべき物語やさぶらふ。」と尋ね申させ給ひければ、御草子ども取り出ださせ給ひて、B「いづれをか参らすべき。」など、選り出ださせ給ふに、紫式部、C「みな目馴れてさぶらふに、新しくつくりて参らせさせ給へかし。」と申しければ、D「さらばつくれかし。」と仰せられければ、 はつくりて参らせたりけるとぞ。

(『古本説話集』より)

語注

*上東門院 藤原彰子。藤原道長の娘。

*大齋院 選子内親王。村上天皇の皇女。

問一 傍線部1・3の「さぶらふ」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア います イ いただく ウ ごぞいます エ お仕える オ いらつしやる

問二 A～Dの会話文について、次の問いに答えよ。

- ① 同一人物が発言しているものはどれとどれか、記号で答えよ。
 ② ①の発言者は誰か。本文中の語を抜き出して答えよ。

問三 傍線部2「さりぬべき物語」とはどういう物語のことか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えよ。

ア いつも読み慣れている物語 イ 礼儀作法を学ぶのに適切な物語
 ウ 和歌に関する逸話を集めた物語 エ 退屈さを紛らわすのに適当な物語
 オ 教養を身に付けるのにふさわしい物語

問四 傍線部4「いづれをか参らすべき」の現代語訳として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア どこに参詣すればよいだろうか イ 誰にご奉仕すればよいだろうか
 ウ 誰を参上させればよいだろうか エ 誰を降参させればよいだろうか
 オ どれを差し上げたらよいだろうか

問五 本文中の空欄 に入れるのにふさわしい文学作品名を漢字で答えよ。

問六 傍線部5「とぞ」の下に補える言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 言ふ イ 行く ウ 参る エ 給ふ オ 書く

問七 紫式部が新しい物語を書くことになった理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 当時、世間には面白い物語が存在しなかったため。
 イ 大齋院から、新しい物語を書くよう依頼されたため。
 ウ 面白い物語は、すべて大齋院のもとに渡っていたため。
 エ 紫式部が、自ら新しい物語を書きたいと提案したため。
 オ 上東門院のもとには、読み慣れた物語しかなかったため。

〔以下 余白〕

国語解答用紙

(注意)
 受験番号・氏名は下の二つの欄に記入すること。
 解答は右に指定された欄に書くこと。

<R02142061>

受験番号	千	百	十	一
氏名				

(注意) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

<R02142061>

受験番号	千	百	十	一
氏名				

(注意) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

国採点
 語欄

				①	1
			と		3
				②	

折
 り
 線

				A		a
				B		って
						b
				問四		
						c

				1		a
						b
				2		
						c
						d
						む

--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--